

まちづくり 実践教育としての シャレットワークショップ

都市計画委員会
都市計画教育小委員会

根上彰生
都市計画教育小委員会主査/日本大学教授

小林正美
都市計画教育小委員会委員/明治大学教授

市民参加型まちづくりが全国的に広がりを見せるなか、まちづくりの現場に即応するより実践的な計画立案能力が都市計画の専門家に求められている。一方で、大学の地域連携の動きともあいまって、都市計画系の研究室が地域社会と連携してまちづくり活動を展開する事例も増えつつあり、建築の基礎的素養としての座学が中心であった建築系学科の都市計画教育も、地域のなかでのより実践的なものへと変わりつつある。

都市計画教育小委員会では、このような流れを「まちづくり実践教育の新しい展開」ととらえ、都市計画教育プログラムに、まちづくり実践教育を位置づけることを意図した活動を行っている。昨年、公開研究会「まちづくり実践教育とまちなか研究室」を実施し、先進的な実践例を紹介したのをはじめに、全国で展開されているまちづくり実践教育の事例収集を行い、その情報の公開・共有を目指している。また、まちづくり実践教育に関する情報交換・共有の機会として、2005年度の学会大会(近畿)において、全国の大学から学生と教員が参加して具体的な地域でまちづくり提案を行う「シャレットワークショップ」および、学術講演会オーガナイズド・セッション「まちづくり実践教育の展開」を実施した。本稿では、今までの活動のなかから、シャレットワークショップの概要と成果をトピックスとして紹介する。

シャレットワークショップの概要

大会の直前の8月26日～8月30日に、全国から公募した学生24名、教員9名、助手2名が参加し、大阪市の東南に位置する平野郷地区で「学生主体によるシャレット

写真1 アーケード街に開設した「まちなみ博物館」



ワークショップ」を開催した。「シャレット」とは、短期間に集中して行う専門的なワークショップの方法のことである。

ワークショップの目的は、複合的であるが、簡潔に言えば以下に集約される。

- (1) 対象敷地に滞在しながら、地域の問題点の抽出、地元の意見・情報の収集、解決シナリオの具体的な提案という一連の作業を短期間に集中して行うことで、学生に実践的な都市デザインやまちづくりの経験の機会を与える(教育的効果)。
- (2) 具体的な問題を抱えた地域に対し、ステイクホルダーと呼ばれる人たちの意見を引き出しながら、まちの将来ビジョンという具体的な提案を還元することで、地元のまちづくりへの関心を高め、議論の材料を提供する(地域への還元)。
- (3) 全国から参加した学生が地元に戻り、同様の試みをする中で、大学や研究室が地域に参加する実践的なまちづくりが全国レベルで推進することが期待される。また参加した学生や教員が対象敷地(平野町)と良好な関係を維持しながら、長期的な視点でまちづくりにかかわっていくことが望まれる(まちづくり活動の普及)。

大阪・平野での実践と成果

平野の抱える具体的な問題は以下の点であった。

- (1) もともと環濠集落であった自由都市として、ユニークなまち並みや街割を維持してきたが、近年、商業地の容積率が高いこともあり、高層マンション建設の開発圧力が強まっている。
- (2) 景観制度をどのようにまちづくりに活用し、既存の地域資産を組織的に活用するかという道筋が見えない。
- (3) 少子高齢化社会のなかで、商店街振興や建物更新、生活の質の向上など、地方都市としての典型的な問題を抱えている。

写真2 住民と地域の景観資源を確認する



写真4 住民を対象とした公开发表会



実際の作業日程は以下のとおりであるが、大変慌ただしいものであった。

1日目: まちあるき、基本的な情報の収集/2日目: 景観資源マップ作成とシナリオ別作業/3日目: 商店街の空き店舗を利用した「平野まちなみ博物館」運営と「まちかど講評会」の実施/4日目: シナリオ別作業のまとめ/5日目: 住民対象の「公開プレゼンテーション」実施/9月1～3日: 大会にて成果のパネル展示/9月2日: 同大会にて公開講評会(→写真1～4)

今回、学生たちは4～5人の班に分かれ、テーマ別の提案をすることにした。班別に迫及したシナリオは、景観資源・環境・歴史・地域コア・居住の5テーマである。とくに景観資源班の作業では、参加者全員が平野町をくまなく歩いて地域の景観資源を拾い出し、景観法を活用した「まちづくりのプロセス」を具体的に示した。参加した学生は学部の2年から修士の2年まで幅が広がったが、総じてチームワークもよく、意識の高い学生たちであったと思われる。

今回特記すべき点は、以下の点である。

- (1) 対象地域内にある全興寺という寺社の境内にある宿泊施設をご好意で無料で利用できたことが全体運営

写真3 ワークショップの風景



にとっては幸運であった。(今後はこのような施設の存在と地域の信頼が必須である)。

- (2) 3日目の「まちかど講評会」で住民からの意見を直接聴取できたことが、全体のプロセスのなかで重要なモメントとなった。
- (3) 学生たちの教育的バックグラウンドや技術レベルが不明のまま共同作業に入るので、予測しがたい要素も多い。次回からは作品集の提出などを義務づけたほうがよいという意見が強かった。

大会の公開講評会では、短期間にまとめる作業にはとくに手慣れた手法に頼る傾向があるのではないかという意見が出された。本来であれば時間をかけて合意形成を行うべき通常のワークショップと、今回のシャレットワークショップはそもそも目的が違うので、短期間に結果を出すという緊張感のもとでマネジメント力を鍛え、成果を実際に世に問う教育プロセスは、まちづくり実践教育の一環としては意義深い試みであったと思っている。

*指導教員: 小林正美(明治大学)、鶴心治(山口大学)、岡絵里子(大阪大学)、小浦久子(大阪大学)、高橋潤(明治大学)、根上彰生(日本大学)、野澤康(工学院大学)、野嶋慎二(福井大学)、真野洋介(東京工業大学)

参考文献

- ★1 野中勝利/「公開研究会 まちづくり実践教育とまちなか研究室」/『建築雑誌』/vol.119/pp112-114/2004
- ★2 日本建築学会(編著)/『まちづくりデザインのプロセス』/日本建築学会/2004
- ★3 日本建築学会大会PD資料集『都市設計・計画の教育をめぐって——教育プログラムと方法』/日本建築学会/2002
- ★4 小林正美、古市修/『まちづくり』における「シャレットワークショップ」の実験と評価に関する研究——岡山県高梁市における継続的ケーススタディ/『日本建築学会技術報告集』/vol.15/pp283-288

ねがみあきお

1956年生まれ/日本大学卒業/同大学院修了/
都市計画/工学博士

こばやしあさみ

1954年生まれ/東京大学卒業/同大学院修了/
ハーバード大学大学院修了/建築・都市デザイン/工学博士